ART BIOTOP

第5号

MAR 2009

アート・ビオトープ　アート・ビオトープ那須　〒325-0303 栃木県那須郡那須町高久乙道上2294-3　TEL0287(78)7833
アート・ビオトープ小豆島　〒761-4115 香川県小豆郡土庄町字戸形甲3417旧戸形小学校内

www.artbiotop.jp

サクラのたくらみ

桜あっての建築

伊東豊雄（建築家）

満開の桜の下に「まん幕を巡らす」行為は、最も美しく究極の建築原理だ。まん幕一枚で内と外を隔て、一瞬にして特別な場所が生まれ、一瞬にして元の自然に還る。あらゆる建築は一枚のまん幕を超えることができない。

川崎景介（マミフラワーデザインスクール校長、花文化研究者）

桜にたくらみがあるとしたら、それは日本人を元気づけることだろう。古来、花の中の花として語り継がれてきた桜。その花が春の本格的な訪れを告げ、農作業の始まりを告げ、日本人を元気にする。未来永劫この優しいたくらみは続く。

Au revoir

桐島洋子（作家）

むかしの恋人の訃報を聞いた。奥方に気付かれていたから、葬儀には行かない。位牌代わりに、初めての逢瀬に一緒に読んだ詩集を探し出す。頁を開いたら、乾いた花びらがひらりと落ちた。あれは満開の桜の下の褥だったのだ。

竹村真一（文化人類学者、京都造形芸術大学教授）

サクラの「サ」は山の神。春になると里に降り来て、田の神として稲を稔らせる。サが降りると〝サオリ〟、その季節が〝サツキ〟。そして「サ」が山と里の間でふわっと可視化されるのがサ／クラ（座）。花に宇宙的ないのちの循環を見る。

花

遠山公一（慶応大学教授）

もし、花が咲かなかったら。爺さんが木に登れなかったら。臼が燃えて灰にならなかったら。意地悪爺さんがシロを殺さなかったら。ここ掘れワンワンとシロが吠えなかったら。そしてもし、それが桜でなかったならば。

人を招くは祖霊のため

安田　登（能楽師）

祖霊は花木に依り憑き、この世に降りる。霊は弔われんがために降りてくる。弔うとは訪うである。人が訪れて弔いは成就する。花見んと人が群集するのが桜の咎と西行は詠うが、咎ではない。桜は弔いの成就のために人を招き寄せているのだ。

ひととゐて

吉田加南子（詩人）

「夜桜やだましたくなるひととゐて」（三井葉子）
だましたい。ええ、つまり、だまされたい。花の宴に。宇宙のたくらみに。空が笑っているわ。花と、そしてわたしたちの愛といっしょに波うって。

予　感

李　禹煥（美術家）

初春の桜並木道は不穏な空気が漂う。黒々の大木が並び、艶やかな裸枝が彼方に向かってしきりに合図を送っているのだ。歩みを止めて眼を閉じると、枝々の先から一斉に狂ったように笑いが聴こえる。今にそれが起こると。

花に思う

―中川幸夫先生のこと

自然からある部分を恣意的に切りとって持ってきたときに、それはすでに自然そのものではなく、自然の解釈になっている。自然とは、情緒の鏡ではない。

庭が、神秘的な世界模型であるなら、生け花もまさしくそうした、思考の形式の表象だ。

類稀な生け花作家である中川幸夫との出会いが、その思いを確信に近いものにした。

多くの人は、中川幸夫の生け花を、自然の獰猛な息吹きを招魂するような、前衛的で神秘的、そして原始的で未来的な、祭司行為だと感じている。たしかに中川さんには、そうした未見の精霊を呼び出す、祭司のごとき雰囲気がある。またじっさいに彼の造形は、言葉で形容すれば、異形で、獰猛で、狂暴なエロティシズムがあり、ショッキングだ。

中川さんは花は生き物である、ということを繰り返し強調する。

もぎ取られようが、枯れようが、圧縮されて花液を絞り出されようが、それぞれの状態と段階で、生きている生命の現存だと主張する。その生命を、彼は「自然」という、私たちじしんの曖昧な解釈から、遠くへ遠くへ、持って去ろうとする。自然の外へ。もうひとつの自然の、そのなかへと。

中川幸夫の花は、遠くへ置き去りにされた、ひとつの生き物だ。打ち捨てられた「もの」の孤独が、再び自然と重なり合う瞬間が、やがて必ずやってくる。

そしてそれは、彼方から、私たちの曖昧な自然観を見つめ返している。

花は生命であり、官能的でエロティックな生殖器であればあるほど、それに手を加えることは、フェティシズムに近づいていく。ところがフェティシズムもまた、自然という曖昧な私たちの世界模型の、一部品にしかすぎない。フェティシズムという生命の花を、さらにまた狂暴に駆使して、純粋な、もう曖昧ではない、自然のモデルを再び組み上げていくのが中川流。

そう考えてみると、原初の祭司のような中川幸夫の姿が、試験管のなかで、フェティシズムを思想的に裏返そうと苦心惨憺するマルセル・デュシャンや、感覚的なものを、微細な破片さえ捨てずに総動員しながら、この世のものでない、イコンのような模型を組み上げていった、あのモンドリアンの姿にダブリ始める。

中川さんにとって、花は世界を切りとる枠組、境界、あるいは皮膜のようなものではなかっただろうか。

中川幸夫の花に、私は自然という概念のもっとも例外のかたちに、ある種のそれこそ定量的な光をあてようとする、思索的な科学者の姿を垣間見るのである。実在が消えても、その影がいつまでも永遠に、残るようにと。

（インターネット・ミュージアムショップ・マガジン、Arts & Crafts Cita Cita A/C MAGAZINE 掲載された記事を再構成したもの）

新見　隆［にいみりゅう］
武蔵野美術大学芸術文化学科教授、アート・ビオトープ那須、ギャラリー册、顧問・キュレーター

アート・ビオトープ「2009年度A1Rプログラム」作家決定。いよいよ待望のプログラムが開始されます。

アーティスト・イン・レジデンス

昨年9月より募集をしていたアート・ビオトープ（ResArtis会員）の、アーティスト・イン・レジデンス・プログラム。国内は東京、静岡、北海道。海外は韓国とオランダから総勢7名5組のアーティストに決定しました。

小豆島で、4～5月「石彫の大野綾子氏（東京）」からプログラムが始まります。7～8月「オリーヴを用いて染色する稲垣有里氏（静岡）」、6～8月「ブコマ・プロジェクトは、石彫のキース・ブッケンス氏（オランダ）、相原正美氏（北海道）、両氏の制作、交流をドキュメント写真として納める小松稔氏（東京）のアート・ユニット」です。

那須では、7～8月「陶芸とガラスを融合させた作品制作する金恵貞氏（韓国）」、10～12月「親子参加のワークショップが楽しみなガラスの伊藤岳氏（東京）」。

那須も小豆島も、目に映るのは圧倒的な自然、環境の変化を日々観察しているだけで心が満ち足りてくる場所。「大自然に触れて刺激を受け、感じたことを作品として表現したい。」という彼らの応募動機は、〝自然の在り方と人間の創造性が互いに響き合い、様々な感性が交流する〟活動になることを期待させる。また、〝市民との交流の場〟として開かれるワークショップでは、各アーティストとも1～2回あり、アーティストの感性に触れる絶好の機会である。これは、アーティスト自身が各自の表現方法をふまえて行う、いわば造形教室のようなもの。無心になってアーティストと一緒に創作してみるのもいいものだ。アーティストの皆さんにお会いできる日を楽しみにしたい。

アート・ビオトープ小豆島主催「大野 綾子ワークショップ」

第1回目『小豆島地産の花崗岩に触れて、もっと知ろう』
日時：4月19日（日）13：00～
場所：㈱イシイの石材製作所
内容：花崗岩を使ったフロッタージュ
▶紙の造形物製作
対象：小学生以上の子供たち
参加定員：15名
参加費：無料　材料費：100円
＊汚れてもいい服装でご来場ください。

第2回目『花崗岩に色をつけて、好きなものを作ってみる』
日時：5月10日（日）13：00～
場所：㈱イシイの石材製作所
内容：花崗岩で好きなかたちを作る
▶彩色してみる
対象：島の方々、小学生以上の子供たち
参加定員：15名
参加費：無料　材料費：300円
＊汚れてもいい服装でご来場ください。
＊いずれも、定員になり次第締め切ります。

ソメイヨシノ（染井吉野）

列島を染め上げていく花の便りと共に、瀬戸内に鰆が来遊し、讃岐路の花見弁当にサワラの押し鮨が入ります。“霞か雲か”の情景に“いざ見に行かん”と人々が集う此の桜は、長い観桜の歴史から見るとびっくりする程新しい桜です。幕末になって染井（東京・豊島区）の植木屋から出て大変な人気で世に広がりました。“染井吉野”と名付られましたが、此の桜の由来は植木屋や古老の記録もなく謎に包まれています。伊豆大島や済州島に原木があるという風説は、調査の結果否定されました。交配実験で“大島桜”と“江戸彼岸”の種間雑種である事が確かめられ、雑種起源説が有力です。自然雑種も伊豆の峠で発見されています。雑種の傑作ともいえる染井吉野は、種を播くと両親の形質が分離するので、接木を繰り返して伝えられて来たものです。大島桜や青肌桜などの苗に切り接ぎをして生産が続けられています。古典的な方法によるクローン（分身）桜です。

小豆島の里にも染井吉野は咲いていますが、島外に発信するには少し物足りない気がします。小豆島は燃料革命の後も乾燥・貧栄養の陽向地に二次林が残存し、陽樹である“山桜”の野生の姿が健在です。山肌に点々と淡い山桜の咲く瀬戸内の春はのどかです。山桜は染井吉野の魅力とは又違った趣があります。

八代田 素樹［やしろだもとき］
小豆島・渕崎在住

千鳥ヶ淵の春、文学に現れた桜

東京・千鳥ヶ淵の桜の歴史は古く、明治三年、靖国神社の建設とともにソメイヨシノが植えられたことに始まり、明治三十一年、英国大使館前にも植樹されました。ギャラリー冊の目前に広がる千鳥ヶ淵緑道と、対岸の北の丸公園のお堀端にソメイヨシノが植えられたのは、意外と新しく昭和三十年ころ。それから五十年以上を経て、毎年、絢爛たる花を咲かせています。

頭上すれすれには桜のトンネル。眼下には、お堀深くまで水を求めて枝が伸び、水面には散桜。そしてはるか遠く、半蔵濠や国立近代美術館のある紀伊国坂あたりまで、見わたすかぎり桜一色です。

桜の樹の下を歩くと、見事な花であるほど、その豪華さとはうらはらに、妙な怖ろしさや妖艶なものを感じてしまうことはないでしょうか？

それは、梶井基次郎の小説「桜の樹の下には」で描かれた奇怪な桜のイメージに、どこかで影響を受けているのかもしれません。冒頭の「桜の樹の下には屍体が埋まってゐる」という一行は、昭和文学界に大きなインパクトを与えました。

文学にあらわれた桜をみると、山賊と桜鬼の化身である美しい姫を描いた伝奇小説、坂口安吾著「桜の森の満開の下」。岐阜県根尾谷にある樹齢千年の淡墨桜にまつわる妖異な物語を描いた宇野千代著「薄墨の桜」。千鳥ヶ淵緑道をはじめ賀茂川、平安神宮、秋田の角館など、桜の名所を舞台に、母と娘の悲劇を描いた渡辺淳一著「桜の樹の下で」があげられます。これらはいずれも、梶井基次郎に端を発する、怪しくも美しい桜のイメージに触発されて生まれました。

このほかにも、昭和の桜守・笹部新太郎をモデルに、樹齢四百年の巨桜の移植秘話を描いた水上勉著「桜守」。花柳界を舞台に二人の芸者の哀歓を描いた有吉佐和子著「芝桜」。観桜、月見、蛍狩といった忘れられていく風習とともに、美しい四姉妹の人生を描いた絵巻物語、谷崎潤一郎著「細雪」などがあります。

美しさと儚さゆえに、生きることそのものと重なる桜は、数多くの文学にあらわれ、いつの時代も人々を魅了してきました。ギャラリー冊には、このような桜にまつわる文学をたくさん揃えております。千鳥ヶ淵の桜を愛でながら、文学にあらわれた桜もお楽しみください。（冊・前田）

参考文献：九段界隈桜みち第七号「桜の小説10選」より

小豆島国際ホテル
予約専用フリーダイヤル
0120-087962
☎0879-62-2111（代表）

講演会　入場無料
「無理をしない子育て」
講師：木村まさ子さん
イタリア料理研究家。医食同源の考え方を、イタリア料理に取り入れた薬膳レストラン「いな田」（神奈川県川崎市）を経営。
2009年3月14日（土）開場：18:00 開演：18:30
土庄町立中央公民館大ホール ＊駐車場あり
NPO法人オリーヴ生活文化研究所　香川県小豆郡土庄町甲1313−1　Tel：0879（62）5511　Fax：0879（62）6114

自然の中の気楽な生活

アート・ビオトープ那須
体験ステイ

お問合わせ・お申し込み　0287-78-7833

工房で、陶芸(手びねり1時間) やガラス(とんぼ玉1時間) を学ぶ体験滞在。豊かな週末の過ごし方…

お気軽体験ステイ
プチステイ・プラン
1泊2日￥10,000 ～(税込。2名1室料金。プチ朝食付)

工房で毎日制作(2時間) を楽しむ5日間。
ゆったりレイト・チェックアウト(13：00)

たっぷり長期滞在
ロングステイ・プラン
5泊6日￥73,500(税込。プチ朝食＆昼食2回付)

ご家族、お子様のキャンプ、研修に、
大型団体向け施設まるまる1棟貸し切り利用。

団体ステイ(別棟アネックス)
一括利用プラン
￥157,500 ～(税込) ＊タオル、シーツセット別。

工房で創作を、しませんか?!

アート・ビオトープ那須では、連日「体験講座」を開催しております。
開始時間：10：30／12：00／14：30／16：00
＊いずれも材料費込み　＊体験講座は時間割制になっております。
ご予約はアート・ビオトープ那須まで。

—陶芸スタジオ—
■手びねり
1時間：￥3,150／2時間：￥6,300
■磁器のうつわ
2時間：￥6,300
■電動ロクロ
1～2時間：￥6,300

—ガラススタジオ—
■とんぼ玉
30分：￥1,260／1時間：￥3,150
■マドラー
30分～1時間：￥1,890
■ガラス彫刻
1時間～：￥1,575:素材￥315～

工芸の名品【陶の造形】

「白の形」撮影／尾見重治

「白の形」

小池 頌子さん

快い柔らかさの土は
とても自由で手の中で
ひらり…ゆらり…と動きます。
白の形…。

陶芸家　小池頌子

清楚でありながらも、存在感のある焼き物の造形作品を見る機会に恵まれた。手にとってみた白いそれは、両手のひらに乗せられるほどで、トサッと心地よい重み。やわらかいカーブをえがく一枚一枚の土のヒダが、実際の重さよりも、見た印象をさらに軽やかに見せているのだと気づいた。

作品名は、「白の形」。花のような形態に近い作品だが、作者の小池頌子さんは、花を作ろうという意図で制作してはいない。下の土台部分の土を荒らしてザラザラした表情をさぐり、それとは対照的に上部には、するっと滑らかで、薄い土片を数枚重ねている。下部の荒さと相俟って、その薄い土片は、ひらりひらりと空間に舞うようでもあり、やさしさと柔らかさを際立たせて表現することに成功している。今まで小池さんが求めてきた青色の作品群とは、また違った新たな作風で、私に新鮮さを与えてくれた。（AB那須　安藤）

小池頌子さんのこれらの新しい作品は、アート・ビオトープ那須にて開催される「小池頌子小作品展」（三月三日～三十一日まで）で見ることが出来る。小池さんが手放すのを躊躇ったとの逸話を持つほどの名品、二期リゾート所蔵作品「Shell」も、アート・ビオトープ那須と、隣接施設二期倶楽部本館バーカウンターにて展示中。また、三月二十日～二十一日には、小池頌子陶芸ワークショップが開催される。

独自の世界観と技術を持つ、小池頌子陶芸ワークショップは、「お一人様受講料二日間一六、八００円（材料費・一作品の焼成費・税込・送料別）」好評受付中。
お問合わせ・お申し込み　アート・ビオトープ那須（0287-78-7833）

お花見弁当

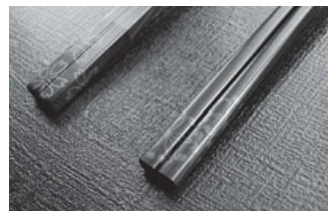
フェアーモントホテル跡地にある「ギャラリー册」は、春になると千鳥ヶ淵緑道の桜並木が目の前に広がり、すばらしいロケーションが望めます。
「ギャラリー册」では、お花見の時期にあわせて、併設カフェ「茶・Cha」にて、由庵特製「お花見弁当」などの特別メニューをご用意しております。東京随一の桜の名所・千鳥ヶ淵「ギャラリー册」で、優雅な春のひとときをお過ごしください。

期間：二〇〇九年三月二十七日（金）～四月五日（日）＊予約制
お申し込みは、**ギャラリー册（03-3221-4220）**にてお受けいたします。

（写真は過去例です。今年はメニューが異なります。）

由庵特製のお花見弁当・大（5,500円）は、旬の食材をふんだんに使った二段重です。
今年は、册オリジナル「京都・六兵窯の〝さくらの箸置き〟」が付いております。
お花見弁当・小（2,500円）には、「さくらの箸置き」付（3,000円）もございます。

～ギャラリー册オリジナル／さくらシリーズ～

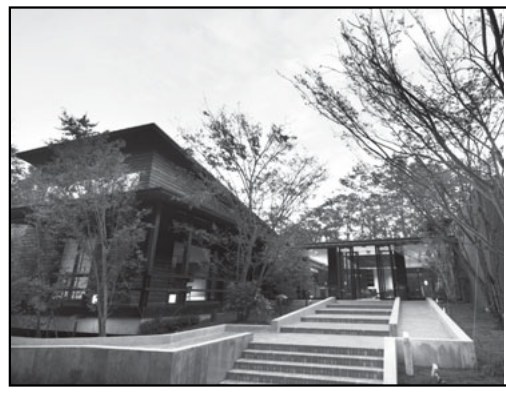

「さくらの箸」
○ 2色塗り分け箸『Sakura SAKURA彩銀漆』
○ 黒呂色漆箸『巴桜文朱』
Design・Produced by 福原栄子
4種類　桐箱入り　各9,450円（税込み）

「さくらの酒杯」
八代清水六兵衛先生監修の京都・六兵窯（ろくべいがま）の酒杯。
2種類　桐箱入り　各4,200円（税込み）

「さくらの箸置き」
「さくらの酒杯」と同じ八代清水六兵衛先生監修の京都・六兵窯（ろくべいがま）の箸置き。
化粧箱入り　1,050円（税込み）

＊ギャラリー册、二期倶楽部でお取り扱い

Art Biotop 那須
ひとりひとりのうちなる発見のために
新たなワークショップ・レジデンス
栃木県那須郡那須町高久乙道上2294-3
Tel：0287-78-7833　Fax：0287-78-6627
HP://www.artbiotop.jp/　E-mail:artbiotop@nikiresort.jp


「結び」をテーマとしたゆるやかな空間
一生に一度だから選びたい…
GUEST HOUSE　観季館
栃木県那須郡那須町高久乙上ノ林1859
Tel：0287-78-7577　Fax：0287-78-7578
HP://www.novarese.co.jp /E-mail:niki@novarese.co.jp

栃木市立とちぎ蔵の街美術館 運営業務をアート・ビオトープが受任

栃木市立とちぎ蔵の街美術館の管理運営業務を、特定非営利活動法人アート・ビオトープが指定管理者制度により平成21年度から平成26年度まで受任することとなりました。

とちぎ蔵の街美術館は江戸時代後期に建築された三棟の土蔵を利用して、平成15年３月に開館しました。栃木市は日光東照宮への勅使が参向する街道（例幣使街道）の宿場町として江戸時代を通じて栄え、江戸末期には豪商たちの蔵が巴波川の両岸に立ち並ぶようになりました。栃木市に今も残る四百以上の土蔵の中でも、この通称「おたすけ蔵」として市民に親しまれてきた善野家土蔵は最も古く、大規模なものとして知られています。その建築年代を示す棟札や瓦などの歴史的資料は、館内に設けられた「蔵の展示室」に常設展示されています。

当館の展示は、栃木市ゆかりの美術工芸品や近代陶芸を中心とした収蔵品展と、幅広いジャンルに渡る特別企画展、小企画展から構成されています。収蔵品には栃木市出身の竹芸家飯塚琅玕斎、日本画家田中一村、洋画家清水登之、橋本邦助らの作品のほか、板谷波山や北大路魯山人など近代陶芸を代表する作家の作品、現代水滴のコレクションなどがあり、最近新たに栃木市ゆかりの浮世絵師、喜多川歌麿の手になる新発見の肉筆画『女達磨図』が収蔵されました。歌麿は栃木に滞在中、豪商四代善野喜兵衛（狂歌師通用亭徳成）や初代善野伊兵衛らと交流したことが確認されており、その意味でも当館にこの作品が収蔵されたことには深い縁があるように感じられます。

次回展覧会は、平成21年３月10日から５月10日まで、『竹久夢二と大正ロマン・昭和モダン展』が予定されています。この展覧会は、竹久夢二や高畠華宵、蕗谷紅児、中原淳一といった大正から昭和初期にかけて「大正ロマン」と呼ばれる時代を背景に華麗な女性像を描いた画家の作品を紹介するものです。作品は日本画、版画、挿絵原画、楽譜、装丁などが百点あまり出展される予定です。のどかな春の一日、歴史ある蔵と洋館が残る栃木の街で、華やかな大正ロマンの世界に遊んで頂ければと思います。

とちぎ蔵の街美術館　0282（20）8228

開館時間： 午前９時～午後５時（入館は４時30分まで）

休 館 日： 月曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）
祝日の翌日（土曜・日曜・祝日の場合は開館）
年末年始（12月29日～１月３日）、展示替等の館内整理期間

観 覧 料： 一般／大・高校生　300円（200円）
小・中学生　100円（50円）

＊　企画展の観覧料は別途定めます
＊　（　）内は20名以上の団体割引料金です
＊　身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保険福祉手帳の交付を受けている方とその介護者１名、未就学児は無料
＊　土曜日は栃木市内の小・中学生は無料
＊　毎月第３日曜日は「家庭の日」のため、県内の小・中学生は無料

交通機関： 電車／JR両毛線栃木駅、東武日光線栃木駅から徒歩15分
自動車／東北自動車道　栃木I.C.から10分

「那須コラム」第２回

寄　花

ある日、突然咲き出した花々を見てうろたえてしまう。
一気に訪れる色の洪水に心も体も追いつかない。
そんな折。うらうらと晴れた日。ふらりと立ち寄った美術館。
石と和紙の小さな茶室に招かれて一服いただいて
ふと顔を上げると、
山に桜、桜、桜…。
しばし眺めているうちに、
おっとりとのびのびとほとほとと、心に春が落ちてくる。

那須芦野・石の美術館 STONE PLAZA。
毎年桜の一番美しい日に茶会が催されます。

二期倶楽部東館レセプション・**依田省子**
（那須検定３級認定者）

2009年度企画展スケジュール

「竹久夢二と大正ロマン・昭和モダン」
３月10日（火）－５月10日（日）
休館日：毎週月曜日（5/4は開館）・4/30（木）・5/6（水）
入場料：大人500円／小・中学生200円

「蓄音機コンサート ― 夢二とその時代」
４月18日（土）　入場無料　　レクチャー：毛利　眞人氏（音楽史研究家）
第一回13：00開演／第二回15：30開演（各回定員70名）

Event Information

Art Biotop 那須
0287（78）7833

3月20日（金）・21日（土）
陶芸ワーク・ショップ「小池頌子」
＊同時開催「小池頌子 小作品展」（3月3日～31日）

第1回4月9日（木）・第2回5月9日（土）・第3回6月8日（月）
「観　月　●　会」
満月の夜、音楽、トークと散歩イベント。　詳細はお問い合わせください。

「ホワイトリムジン屋台」 11:30～14:30まで営業（不定休）

GALLERY 冊 SATSU
03-3221-4220
11:00～19:00　月曜休廊

3月3日（火）～8日（日）
「東京国際ガラス学院2008年度修了制作展」
基礎科・造形科・研究科・研修科研修生、総勢19名による修了制作展。
＊オープニングパーティー　3日（火）17～19時

3月11日（水）～20日（金・祝）
「東京国際ガラス学院展」
開校して11年、多くの卒業生を輩出してきました。彼らの足跡、そしてこれからを展示します。　＊懇親パーティー　14日（土）15～19時

3月24日（火）～4月19日（日）
「―回文の庭園―　福田尚代・新見隆二人展」
桜の祠爛漫、千鳥が淵。 春の、五感共同体。美味茶席、豪華弁当、万物生命満喫会。
不世出の回文アーティスト「言霊のめくるめく呪文世界」に、 四季の庭スケッチ、言葉の人形が合作。乞うご期待。

4月11日（土）15:00～17:00
第15回夜のサロン「福田尚代×新見隆 対談」
「回文アーティスト福田尚代の言霊世界」
参加費:2000円　要予約

4月25日（土）～5月17日（日）
五節句シリーズ①「端午の節句と五月の室礼展」

5月23日（土）～6月14日（日）
「環境的芸術家コロニーをテーマに」
言葉、身体、環境＋地球リテラシー

発行：NPO法人アート・ビオトープ／発行人：北山ひとみ／編集：富田勝彦／協力：安藤麻衣子、菊地麻里絵、前田さつき、村井孝行、依田省子／執筆：伊東豊雄、川崎景介、桐島洋子、竹村真一、遠山公一、新見隆、八代田素樹、安田登、吉田加南子、李禹煥／印刷、DTP：エデュプレス
＊本紙記事の無断掲載を固く禁じます。